
残念ながら、日常は破棄されました

疾風S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残念ですが、日常は破棄されました

【Nコード】

N8185S

【作者名】

疾風S

【あらすじ】

「あーなんだ。うん。ここはどここのファンタジーの世界だ?」「俺、煉牙翼はどこにでもいるような高校生。日々の日常の「コマである帰宅という行為をしていたら少女と男が戦っているのを見かける。そこで見たもの、それは「……魔法?」

日常を過ごす少年の非日常の数日を語ったファンタジー小説

注：作者の初作品です。生ぬるい目で見てくださいとありがたいです。残酷な描写は念のためです。

日常と非日常（前書き）

はじめまして。この作品を読んただきありがとうございます。
作者の初作品です。生ぬるい目と寛容な態度でお読みください。

日常と非日常

「……何だ？　ありゃ？」

ここはいつからファンタジーの世界になったんだ？

そこには、宙に浮き・炎や見えない何か（地面が破壊されていくから何か出ていると推測）が飛び交い、戦っている二人？（こいつらは人間という部類でいいのだろうか？）がいた…。

俺、煉牙翼は高校二年、趣味は今の特になし、性格は…自分ではわからないが、悪友に言わせると、いつも一歩引いて物を見ている冷静な奴らしい。（たしかに、自分はそう簡単に感情的にはならないが…）

高校での成績は中の上から上の下くらい。学校自体も中の上くらいと評価されている学校である。先生に嫌われているということもない。……と願いたい。生徒の中では積極的にまとめるタイプではないが、いざという時には頼りになると言われているらしい。

「ツバ！　一緒に帰ろうぜ」

今日の授業も終わり、放課後、特に用事も掃除もなかった俺は仲のいい悪友であるリュウに声をかけられた。

ちなみにツバとは俺のあだ名で、『つばさ』から『さ』を取っただけというなんとも安直なネームである。リュウは俺の悪友、神坂龍也を呼ぶ時のあだ名で、こっちも『りゅうや』から『や』を取っただけである。

「別にいいが……。お前、今日は委員会だろ」

こいつはかなりフリーダムで適当な奴ではあるが、なかなか能力は高く、さらに面倒見が良かったため、生徒会の役員（しかも副会長）になっているのである。

「そんなのどうでもいいんだよ。俺はお前と遊びたいの」

「お前……。もしかしてこれなのか？」

「ちげえよ！」

「そうか…。俺は普通の男だからな…。お前とは違うんだ……。じゃあな」

「人の話を聞けよ！！！！！」

まあ、こんなことも日常茶飯事だったりする。こいつは仲がいい奴は多いはずなのに何故か俺とよく遊ぼうとする。……。ルックスはいいから彼女でもつくって遊んでやればいいのに……。まあ、俺もこいつといると楽しいからいいんだが。

「だから、俺は、友達として、お前と、今日、遊びたいの！」

「俺は別にいいが……」

「今日は委員会です」

いつの間にか（と言っても俺はリュウの背後から来ていただけなので見えていたが）リュウの腕を掴み、冷淡な声で会話に入ってきたのは同じ生徒会の会長である。

「アハハハハ、会長。冗談に決まってるじゃないですか」

「あなたはそうやって何度さぼっているのですか。そろそろ実力行使に出ますよ」

「いや、もう出て 痛い！痛い！その関節はそっちの方向には曲がらな」

ポキッという軽快な音とともに、関節が曲がってはいけない方向に曲がってしまった。

「拘束するつもりでしたが、少々抵抗されたので曲げすぎてしまいました。まあ、いいでしょう」

「いやよくな は、反対側の腕までやろうとしないでください。」

「じゃあ、このまま生徒会室まで行きます。それでは」

騒がしい二人（一人がわめいているだけだったが）が行ってしまった。そうなる、することがないので一人で帰ることにした。

俺は一人暮らしで毎朝学校まで約2駅分を自転車を通っている。
それはつまり、帰りも自転車であることを意味している。

ちなみに、俺は裏路地が好きだ。あの物静かな感覚が俺の好みなのである。何故かって？どうしてもというしかこの感覚は説明できない。

そういうことで自転車に乗り、この放課後の予定（帰って寝ようかな）を決めながら家まで裏路地を通りながら帰っていると、1駅とちよつとくらいのところでは何かおかしな音が聞こえた。

（何だ？今の音は？）

ここで、俺は帰ることおかしな音の方向に行くのを天秤にかけた。そして音の方向へ行くことに決めた。何故かって？運命とでも言えたらよいが、要するに予定がなく、暇だからである。

自転車を疾走させながら、俺はそっちの方向に向かい、冒頭の情景を目撃するのである。

「くっ！」

片方の少女（スカートをはいているのだからそうだろう。でなければおかま）が苦しそうな声をあげる。

「おらぁ！」

もう片方の男（こっちは声から）少女の方に向かって腕を振りぬく。絶対当たらない距離なのに、

「っつぁー！」

何かがぶつかったかのように吹き飛ばされ、地面に打ち付けられる。

「はっ！その程度か。残念だな。とどめだ」

地上に降りてきて、何か溜めるようなしぐさをしている。たぶんであるが少女が受け切れないような強力な攻撃を打つためだろう。

「っ！まずい」

なんとか少女も体勢を立て直すがたぶん受け切れないだろう。そうでなければあんな隙だらけの溜めなんてするわけがない。

ここではたぶん俺のような存在はイレギュラーだろう。だからこそ俺はどちらの味方もできるし、逃げてもいい。なら普段の俺はどうするか？逃げるさ。まだ俺は死にたくない。リュウや友達とあのバカみたいな日常の中にいたい。でも、ここで俺は普段と違う

選択をした。いや、してしまった。

自転車を全力で漕いで一気に加速させる。そして、男の横にそのままの勢いでぶつける。

「なっ！グハッ！」

直前になって気がついたようであるが、溜める体勢にであったので避けきれない。そしてそのまま衝突した。

「くっ！」

俺の方もその反動で自転車から転げおちる。何とか受け身を取るのが勢いがあつたのでダメージは少なくはない。

「えっ!?!」

今になって少女が何が起こつたのか気付いたようだ。驚きの声を上げる。やはり俺はイレギュラーらしい。

少し落ち着いたので吹っ飛ばした男の方を見る。倒れてはいたが、あの感じだと、

「ククククク」

そう言いながら立ちあがる。

やっぱり生きている。結構なダメージになると思ってたんだがな。まさかこんなに早く立てるなんて。

「危なかったぜ。気がついてシールドを張っていなかったらどうなっていたか」

あれま！魔法って便利だな。そんなこともできるなんて。

「とりあえず、なんだ、殺すか」

その言った瞬間、殺気がこっちに向く。こいつはやばい。何がやばいかわからないがやばい。

「やめて！その人一般人じゃない！」

後ろの方で少女が叫ぶ。たぶん、魔法使いには一般人を守るとかいうこともあるんじゃないかな？いや、これはかなり推測であるが「関係ないな。そいつはオレを襲ってきたからな。死んでもらおうか。まあ、お前はこいつが殺されたあとにでもじっくり殺してやる」

こいつはそいつの関係ないらしい。だけど、

「気に食わないな」

「ああ？」

本当に気に食わない。

「お前が俺に勝つのが当たり前って言ってるのが気に食わないな」

「なんだと！」

「こんな少女を倒すのにも大技が必要な奴なんて雑魚だな」

「てめえ！」

いい感じに挑発に乗ってきた。こうすれば、

「いいじゃねえか。殺してやるよ。」

その瞬間両方ともが戦闘態勢に入る。

ここからあいつまでは約15メートル。あの少女からここが5メートルだ。

まずは俺があいつまでの最短距離を走り出す。

「ふっ」

その瞬間男が腕を振る。たぶんあの少女を吹き飛ばした見えない攻撃。

(それは読めてるんだよ！)

手を振った瞬間俺は横にステップする。まるで見えているかのようにかわす。

「なっ！」

かわされた事に驚いたのか声を上げる。そして、その隙について

また男に向かって走り出す。

「ちい！」

男が今度も腕を振り攻撃を仕掛ける。そして、またその攻撃を横に跳び、かわす。その時に少しかわしきれず制服の端が切れるがまた走って近づいていく

あと1歩で攻撃範囲のところまで来た。

「くそっ！」

その瞬間男は飛び上がろうとする。攻撃範囲から逃れようとして、

だが、俺は逃がさなかった。

「はああああああああ！」

そのまま一歩踏み込みながらの対空アップ！。その攻撃が男の顔に突きささる。

男は切りもみしながら吹っ飛んだ。

「あなた…術師なの…」

後ろから少女の驚いたような声がする。

「ふん」

俺はそれに答えずに鼻で笑う。

「くっくっく!!」

吹っ飛んだ男が立とうとして膝立ちになる。

「術師二人は相手がわりーな。ここは引かせてもらっぜ」

男はよろけながら立ちあがり、空を飛んで逃げていった。

「助かったわ」

そう少女から声をかけられる。が、

「ちょ、ちょっと!どうしたの!?!」

その場に俺はへたり込んでしまった。

「腰抜けちまった…」

そうなさけない声を出した。

しばらく少女はそれがどっぴろい意味でどっぴろい行動なのかを考え
て…

「はあ!?!?」

と思いつきり叫んだ。

日常と非日常（後書き）

誤字・脱字などは3年以内に直す予定です。知らせてくださるとありがたいです。

種あかし

「あんたのどこにそんな腰が抜ける行動があつたのよ!？」

少女（いまだに名前がわからん）が叫びながら問い詰めてくる。

いや、だって、ねえ…

「あいつに自転車で特攻した時からあいつが逃げてくれるまでだが？」

何かおかしいなことでもありますか？と俺は聞きたくなるような声で返す。

「えっ？いや、だって、…あんた余裕ありまくりだったじゃない。どうして余裕あるのに腰がぬけるのかな？って思ったんだけど？」

「余裕がある人の理由として考えられるのはまあ3つくらいかな」

そこで俺はいったん言葉を切り、聞こうとしている少女の前に手を出す。

「1つ目はあいつが逃げた理由でもある俺が術師？だったかな。それである場合」

そう言いながら一本、指を広げる。

「あんた、術師なの？」

いぶかしむ声が横から聞こえる。

「まあ、その可能性は客観的に見て少ないだろう。まず、術師なら自転車特攻じゃなくて術を使うだろうな」

俺は術師じゃないしな。

「だったら、どうしてあいつの攻撃をよけられたの！？魔力の流れが一般人には見えないからあいつの風がどこに来るかはわからないはずよ！」

ありえない。と言うような声で言ってくる。彼女からすれば見えない攻撃は避けられないのだろう。

「別に見えなくてもあれならよけられる」

俺は見えなきやよけられないという大前提を崩すことを言う。

「あいつは攻撃する時に腕を振るだろ？それで攻撃のタイミングは読める」

さらにと俺は続ける。

「あいつが攻撃する前に挑発しておいただろ。それにあいつは俺を一般人だからって油断していた。そうしてあいつは小細工なしに俺を直接狙ってくるようにしたんだ」

そこで一息いれ続ける。

「まあ、あそこが一番の勝負所だったな。あそこであいつが冷静で

直線以外の攻撃が来ていたらたぶん当たってた」

横を見ると続けて、と言っているような視線を向けられてしまった。

「二発目のは簡単だ。あいつが一発目を避けられたからって焦る。その間にも俺が近づいてくる。そうするとだな、曲げるとかの小細工していたら俺の攻撃が先に当たるかもしれないだろ。だからあいつは直線的に狙ってくるって読めるんだよ」

「だからあんなふうによけられたのね…」

「そういうこと」

まあおおむねこんな感じだ。どれも予想や相手の心理が読めないと使えなかったいわば賭けみたいなもんだから俺も緊張していた。

「だからといって緊張して動けないと死ぬからな、そこは自分の読みを信じた」

「ふ〜ん。そうなんだ」

おいおい、これって命のかかった賭けをしていたんだぜ。それをそう簡単に流すなよ…

「まあ、話を戻して余裕の理由のもう一つが今みたいな読みができる奴な。俺は勘も入ってたからそこまで余裕じゃなかったけどな」

「まあわかるわ。で、最後は？」

「ただの馬鹿」

「はぁ？」

俺は聞かれた質問に対して即答する。

「補足するなら、こんな状況でも少女が襲われているから助けるといって飛び出して勘ですべてを何とかする主人公みたいな奴ともいう」

「一番うらやましいタイプだ。こんな奴だったら簡単に事後処理もできてフラグもバンバン立てていくだろう。」

「……まあわかったわ……」

「わかってくれて結構」

「で、どうすんの？これから」

「……………へっ？」

「いや、これからどうしようかっていう話。あいつは引かせてもらって言うってただけでそれって来るでしょ、また」

……………そんなこと言ってたなあ。

「目をそらしながら現実逃避しない！」

「はぁ〜」

どうするか、まったく案がない。と言つよりは、

「情報がたりない」

俺はそう呟く。

「まったくもって情報がたりない」

今度は少女の方を向いて言い切る。

「教えてもらつぞ。いろいろと。あいつについても術師についても
だ」

そう言いながら俺は作戦を考え始めることにした。

種あかし(後書き)

誤字・脱字は3年以内に直す予定です。教えてくださると助かります。

非日常について

「まずは名前だな。俺は煉牙翼。お前は？」

「あたしは」

答えようとするのを遮って

「そういえば知ってたな。紅美香。だったよな？」

そう先に言う。すると紅は

「な、なんで知ってんのよ。まさかあなたストー」

「断じて違う。というか俺の名前を聞いて何も思わなかったお前の方がおかしいと思うぞ」

そう言つと、なにがおかしいのか説明しなさいと言っているようににらみつけてくる。お〜こえ。

「まあ、これはお前を助けた理由を説明すべきかな」

「そういえばそうね。どうして？」

その先にはあたしのほうが悪い奴かもしれないじゃないという意味の含まれているのだろう。

「1つはお前が美少女だからだ」

そういつと少し頬を赤く染めて、目線をそらしながら、

「あ、ありがたく受け取っておくわ」

と言った。

「まあ、これはあまり関係ない理由なんだがな」

「関係ないんだったら言っくんじゃないわよ!」

照れて損したわ。とか言いながら視線をこっちに戻す。

「1番の理由は服だな」

「服?」

そう言いながら自分の服装を見回している。

「というか俺の服見てなんか思わないのか?」

「?.....!ああ!それ、うちの制服じゃない。」

そう言った紅もうちの制服なのだが…俺は遠くからでも気がついたのに気付くの遅くね…。

「だから助けた。うちの生徒だしな」

「でも、それってあたしが悪い奴じゃないって言う理由にならないわよね?」

普通だったらすうだな。だけどな

「いや、なる」

俺は言い切る。ここだけは譲れない。

「今の生徒会のあるうちの学校に悪い奴がいるわけがないんだよ」

それが俺の譲れないところ。今の生徒会は確かに生徒会らしくはない。かなりふざけているのかもしれない。でも、それ以上に俺たちは楽しんでいる。あいつらのやることは全部生徒会としてはおかしいが面白いからな。

「それとな、お前、俺と同じクラスだろ」

「へっ？」

やっぱり覚えてないのか。

「もう少し外にアンテナ伸ばそうぜ。いつも本ばかり読んでないでな」

こいつが同じクラスなのに俺を覚えてないのはいつもこいつは本を読んでばかりなのである。基本的にはどんなことにも不干渉でいた。

「俺って結構有名だぜ」

正確に言うにはリュウとのコンビで有名なのである。おもにあいつがいろいろとやって目立ち、俺がその後かたづけをすること

である。

「そ、そうなの…知らなかった。」

「それに、俺とリュウはいろんな人を見てきたからな。ある程度なら隠していてもそいつがいい奴が悪い奴かはわかる」

こいつもあいつといて得た能力だ。あいつの方は本当に正確だが、俺でもいい奴が悪い奴かくらいはわかる。

「まあ、これくらいにして、とりあえず術師について聞かせてもらえるか？」

「わかったわ」

そうやって俺の知らない非日常を語りだす。

「結局まとめるとだな、」

そういつていろいろ話を聞き、必要な情報をまとめる。

「まず、術には何が必要だあだこつだあつたが、あいつに会う前に俺が術を使えるようにはならないんだな」

確認の意味を込めながら尋ねる。これは結構重要な事で俺が直接戦力になれるかどうかを表す。あいつはもう油断してないだろうし、ハツタリで勝てる可能性はほとんどない。

「なんかいろいろと話したことを約されたけど…まあ無理ね。天才でも修行して3年はかかると言われているわ」

つまり直接は戦えないということになる。

「おまえは炎を使えて、あいつは風を使えると」

「そうね。その通りだわ」

「そして、あいつはおまえよりも強いと、正面から戦えばほぼ負けるということでOK？」

「残念ながらOKだわ。あたしがなんとかしたいのに3割も勝率がないなんてね…」

「まあ暗い雰囲気になるのは自由だが、」

本当に暗くなりたいのはこっちだよと言いたい。ただでさえ巻き込まれた？のに勝ち目が薄いなんて最悪じゃねえかってな。

まあ、そんなこと思っても仕方がないので次に進めることにする。

「じゃあ、次はあいつとおまえの関係について話してくれ。無関係

ということはないだろう。襲われてたし、」

なおかつ、さっき『あたしがなんとかしたい』って言ってたからなと心の中で付け加えておく。

あまり話したくないんだけどね…と言い置きしてから話し始める。

「両親がね、殺されたのよあいつに」

そう感情がないような声で語り始めた。

彼女の家は代々術師の家で少なからず彼女も術師として修行していた。今では術というのは伝統芸能みたいなものらしい。両親は術師としてなにか仕事をするということもなく普通に一般人として仕事をしていた。術師としての修行も昔に比べるとかなり優しいものであったということである。まあ、そういったことを除けば少しだけ裕福などにもある家庭だったということだ。

しかし、その平穏をあつ男は一瞬で壊した。1年前にいきなり現れ、両親と戦い始めた。その結果二人とも殺され、両親に隠されていた彼女だけが生き残った。

そうして彼女は一人ぼっちになった。

「あたしがね、あいつをなんとかしないとあいつに殺される人がで

るかもしれない」

あたしの両親みたいだね。と笑って付け加える。

その笑顔は無理をしているのが丸わかりであり、話しているあいだも声には感情がなかったが、悲しみを隠しているのがわかった。

「そつだな……」

俺はそれしか言わなかった。……言えなかった。

非日常について（後書き）

誤字・脱字は3年以内に直す予定です。教えてもらえるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8185s/>

残念ですが、日常は破棄されました

2011年10月9日01時07分発行